

バアス党に関する覚え書き

—復興アラブ社会党—Ba'ath al-Arabi—

はやし
林

たけし
武

まえがき

Al-Istirāki (Arab Socialist Renaissance) が、6月に行なわれたレバノンの総選挙で予想以上に伸びを示したことが注目されている。このことの意味はつぎの2点にかかわる。(1)アラブ連合共和国シリア州の5名以上の閣僚はバアス党員だといわれてきたが、それらのバアス党系の閣僚は副大統領ホウラーニをはじめ、全部が昨年末から今年にかけて辞職しており、シリアに生まれたこの社会主義政党の衰微が語られていたおりであったこと、および(2)バアス党は当選者こそ出せなかったがレバノンで伸びたということである。

もともとレバノンでは社会主義政党の発展が見込み薄とされていた。その理由は、(1)かつて社会主義を呼称する政党はあったが、指導者の失態から大衆にアピールできないでいたこと、(2)社会主義支持の階級である中産階級以下の都市プロレタリアートが第3次産業部門に集中していること、(3)政治、経済における西欧諸国への依存性が、社会主義化による国有化、公有化を許さず、またかりに国有化を強行しても経済自立に確固たる見通しを与える財源がないこと、(4)ここだけはNasserismから守りぬきたいという自由主義陣営側の意気込みなどである^(註1)。こうした点からこの国の社会主義勢力の伸びについては大して関心もたれていなかった。もちろん今回の選挙をもってただちに左翼勢力の成長と即断してはならないし、

また過大評価できるものでもない。

けれどもここであらためて考えられてよいことは、シリア地区におけるナセル体制とバアス党、バアス党とレバノンという関係である。バアス党を含めて社会主義政党がレバノンで伸びないと考えられていた理由にはさきにふれたが、注目されることはこのバアス党が都市中産層以下においてより地方で伸びたということであり、その支持層が中小の手工業労働者などにおいて伸びていると思われることである。さらにレバノンは近隣諸国に比し格段に高い識字率を誇っておりながら、そうした識字層に潜在的失業、半失業者が多いということでは周辺諸国と違った酵母を持っているといってよい。この点ではあらためて同党の今後が注目されよう。

ナセル・レジームとバアス党との関係の変化は、バアス党とナセルの連合がU.A.R.の成立だといわれてきただけに特に注目すべき条件をそなえているように思う。このことはのちに分析を進めるとして、ひとまずバアス党の歴史と性格とを分析しよう。

I バアス党の歴史

バアス党の歴史をみるまえに、われわれはシリアにおける政党、民族主義者の性格を知っておくことが必要である。

1943年からシリアで政権をとっていたのはクワトリ(Shukri Quwatli)の率いる反フランス・独

立運動の「国民ブロック」(Al-Kotla al-Wataniya)で、かれは自由フランス軍の占領下での選挙で大統領に選ばれている。この党は、大衆の政治的無関心に苦しみながらも、反委任統治運動を続けてきたナショナリストたちによって指導されていた。かれらはイギリスとフランスをかみ合わせることで徐々に利益を積み重ねてきた。しかし形式的な独立が達成されると、もはやかつてのようなアジテーションは行わず、むしろろくかい、巧妙な駆け引きで政界を左右してきた。結局独立達成ということがかれらの歴史的性格から可能な最大限の目標であった。

これら指導者の大部分は正統派回教徒である。職業別にみると第1が都市在住の大地主、ついでトルコ帝国時代の官吏、第3グループの医者、法律家、商人などはわずかに2人にすぎない。年齢的には50才以上が18人、60才以上が12人を占める。このなかにはジャーナリズム出身者や学者などのいないことも注意すべきであろう。しかもここにあげたグループの構成は1936年の閣僚や議員のそれとほとんど変わっていないことも重要である。またこれら指導者の多くは外国留学経験をもっているが、政治的綱要は便宜的におりにふれて作られたにすぎない。何時も変わらずかかげられていたスローガンは国民連合だけである。かれらの政治哲学は18世紀風の自由主義で、したがって独立達成とともにその歴史的使命は終わったのであるが、政治的手腕にはろうかいな成熟を示していた。かれらが権力の座についた時は役得の分け合い、収賄、親族の任用、利権の独占などが続いた。

この金権的寡頭支配に対抗する中産階級の政党ができたのは1949年で、人民党(Hazib shaab)がそれに当たる。当初は青年層、下級官吏などに支

持層をもっていたが、北部シリアのアレッポ付近を基盤とするところから繊維・綿花・穀物商などの利益を代弁せざるをえず、新興の大企業、大資本への傾斜を示し、主脳部も壮・老年が多い。この北部シリアの商工中産層を背景にして、人民党とは違ってよりはっきりした政治的要求をもった社会主義政党が中・南部の農村、小都市に現われた。それがバアス党である。

国民ブロックが政治的威信を失う機会はずばずパレスチナ戦争によってもたらされた。このパレスチナ戦争での敗北はアラブに深刻な動揺をもたらした。民族的屈辱感はやがて旧エリートへの不信感を増大させていった。古い型の民族主義者たちがアラブ難民に対するポイント・フォア援助を拒否せざるをえなかったのは、相当程度に近代化していた難民たちが、この援助によって積極的に近代化過程にはいる機会となることを恐れたということもあるかもしれないが、何よりも大衆の意向を押しきる自信がなかったからである。

パレスチナ戦争の意義は、従前アメリカが中東で維持してきた信頼を一挙に失ったということであり、アメリカ帝国主義ということばが大衆に浸透してゆくきっかけになったことをまず指摘しなければなるまい。つぎに植民地支配時代を通じて徐々に積極化の方向をたどってきた大衆を背景とする世論が、はっきりとした政治的意志を国民的結束と規模で示し始めたという点にある。こうした大衆の世論が組織化され、政治のわく外におかれていることへの不満の表明を人民党の出現とみることができよう。しかしさきにも述べたように旧指導者への不満が人民党内部にもあったとしても、それはかれらが寡頭支配に割り込むと消えてしまうような不満であったから、世論と一般の期待とを裏切る結果になったといわなければなるま

い。そしてかれらはフランス、トルコの謀略によってアレキサンドレッタという大市場を失ったため、イラク、ヨルダンという市場を確保すべく積極的にのり出さざるをえなくなっていた。したがってここでもかれらはかつての「大シリア王国」建設の夢を復活させたがそのかげには外国勢力の暗躍があった。

そして、ここで重要な事がらとして軍人の登場がある。すなわち古い型の政治家たちは自分たちの威信を守るため、パレスチナ戦争の敗北の責任を軍に押しつけようとして失敗したのである。この戦争の間に政権担当者たちの無能と腐敗に対する自然発生的なデモが暴動化して政情が不安になった時、危機の乗り切り策として打った手は敗戦を軍部の責任にすることであったが、逆にザイム大佐(Husni Zaim)の指揮するクーデターに見舞われた。

このザイムは一般の期待を受けて出発したが、イギリスの計画した「大シリア王国」復活のプランを拒否したので人民党と手を切ることになった。フランスはこの時かれに借款を与え、そのかぎりでかれは国民感情に背反することはなかったが、アメリカの石油資本にパイプ・ライン敷設を許可したことで挫折した。クワトリでさえアメリカのイスラエル援助に対する報復として退けていたところを、性急な近代化論者のザイムはあえて許可した結果、1949年8月のヒナウイ大佐(Sami Hinnawi)のクーデターで消えていった。ヒナウイはパイプ・ライン協定を破棄したが、また自由に動き出した人民党の「大シリア王国」案に踏みきって同年12月共和制を打ち出すシシャクリ(Shushakri)のクーデターで葬られた。こうした背景のもとでバアス党は生まれてくる。すでに述べたように旧民族主義者たちが大都市のごく薄い土層

によって形成されているのとは反対に、新興政党はいずれもはっきりした地域的性格を示している。人民党は北部の大農法を取り入れている農業投機資本、商業資本を代表し、バアス党は中南部の軽工業、封建的小作農地帯を背景としている。北部シリアは戦後急に発展し、緑化された大農経営地帯で、アレppoなどの商業資本が投入されている。灌漑による耕地拡大には大きな期待がもてるこの地域は、綿花、穀物の生産が大土地所有と近代経営とで著しく合理的な経済性をもっている。ここが人民党の故郷である。

これに反して中部シリアのハマ(Hama)、ホムズ(Homs)地域は、農業では小作制度が圧倒的である。収穫の80%以上が都市居住の不在地主に取り上げられる。またハマはシリア第3の織物工場地帯であり、バアス党が生まれるのはここである。シリア南部は農業的には恵まれておらず、特にホウラーニ家などの大土地所有者の支配下にある地域はひどいとされている。

復興アラブ社会党すなわちバアス党は、シシャクリ治下に準備がすすみ、シシャクリ没落後の1954年に生まれた。もともと独立した2つの異なった政党であったものが合併してできたもので、「復興アラブ党」と「アラブ社会党」とがその前身である。「復興アラブ党」(バアス党)は1940年大戦の最中に生まれたという。指導者は高校教師ミカエル・アフラク(Michel Aflag)という学究肌のクリスチャンであった。かつてソルボンヌ大学で歴史学を専攻したアフラクは、帰国後高校に教鞭をとるかたわら中近東各地をくまなく旅行したという。また一説によれば1943年までシリア共産党の指導分子であったともいうが確かではない。しかしこの旧バアス党が公然たる活躍を始めたのはシリアが独立を形式的にもせよ達成して

からである。

他方の「アラブ社会党」はアクラム・ホウラーニ (Aklam Hourani) を中心として1950年にできた。かれは非常に現実的な政治感覚にみちた手腕家であって、のちに文部大臣になったりアフラクのような哲人風の理論家と対照的である。

この2つの政党は1949年の選挙では少数勢力であってなら目だつ活動はできなかった。しかしヒナウイが人民党と連合して「大シリア王国」案に踏み切った時、共和主義の議員たちに呼びかけて「共和ブロック」を形成、ヒナウイ・人民党に反対した。シシャクリは人民党を倒すために社会主義者たちと協力した。社会主義者たちはこの権力をかりて一挙に体制を整え、その手はじめに朝鮮戦争のブームに酔う大地主層、投機商人たちに物価騰貴に悩む大衆の不満を向けてゆき、やがて農地改革を実施し、源泉徴収の税制など一連の近代化計画を実施しようとした。しかし農地改革案などでは急進的な改革を避けるため、大土地所有制限を目的とする法案を人民党が提出するというような逆手にほこさきをかわされたりしており、のちにシシャクリの独裁権確立後には急進的農地改革案を出したが、改革のための基礎資料を踏まえておらず、不正な登記や国有地の占有などを徹底的に廃止するにいたらないでしまっている。

1952年、シシャクリはかつて人民党・大シリア王国プラン打倒のために提携した2つの社会党の弾圧に乗り出した。それは社会主義者たちが総予算の40%を越える軍事予算を承認しないためであった。そして翌53年、それまで黒幕的存在であったかれは大統領に就任、独裁体制が整備されてきたとき、かつて追放した2人の社会主義者に協力を求め、両党の統一を勧告したものとみられる。

この間にバアス党はかれらの高踏的なラディカ

リズムの欠陥を知るとともに、インテリ層、青年、学生、軍の青年将校、下士官たちの間に深く食い込んでいった。軍人への影響にはハマ出身のホウラーニの熱弁が力あったらしく、またシリア軍青年将校たちにはハマ、ホムズ地方の出身者が多かった。こうしてバアス党はシシャクリを転覆させるための組織を軍のなかに持ち込むこととなった。1954年1月、シシャクリはふたたび社会主義者のいっせい検挙を行なったが、同年2月バアス党系の少壮軍人によって倒された。同年秋の選挙で142議席中16を占めるにすぎないバアス党が経済相、外相の椅子を確保できたのは軍を背景にしていたからである。

経済相と外相の椅子を2つながらに確保することは、バアス党にとっては必要なことであった。この党は民族を再興させるためには植民地主義を敵としなければならないし、またこの植民地主義と密着している国内の封建的勢力を倒さなければならない。この2つのことを同時に実現するには社会主義体制をとるほかないという論理を基礎としているからである。

こういうバアス党の外交方針は、中立主義、反植民地主義である。この点では、大衆の根深い反イスラエル感情の反映としての反米意識の現われとして、アメリカを困らすためにはアメリカの一番いやがるソ連と親しくすることだ^(注2)という空気にバアス党の施策はマッチしていたし、また経済的にソ連の援助によって経済建設を図ろうとしていた。バグダッド条約、地中海防衛機構にたたまかけてアイク・ドクトリンが登場するにおよんで世論は硬化し、共産党との公然の共同闘争が行なわれた。こうしたことから西欧側ではバアス党をしばしば共産党と同一視しているのである。

1957年、ダレスが出席してバグダッド条約理事

会がトルコのアンカラで開かれたとき、同理事会は「ソ連の脅威の増大」にかんがみトルコに軍事援助を増額すると発表した。ソ連と経済協定を結んでいたシリアとしては、当時ひん発していた北部のシリア・トルコ国境周辺の紛争も考えあわせて理事会の決定を挑戦と受けとらざるをえなかった。人民党から共産党にいたるまでの挙国一致体制ができた。だがバアス党はここで危機に立った。共産党の活動が目だって活発であることおよび右翼の大物がソ連と往来し始めたことである。国民感情には乗っていても、確固たる支持層をもたない弱みが国内外の緊張の継続にたえがたくなってきた。封建遺制を脱しきれないひよわな中産階級と、階級的には無性格なインテリ、青年、学生、少壮軍人という背景が左右両翼からの挾撃にあって焦りをかくせなくなった。一方不安定な国内情勢にストライキは続発していた。階級闘争の激化を押さえながら、民族主義の立場を貫くためにはより大きなシンボルをかかげてきりぬけるほかないとの結論に達した。すなわちナセルの圧倒的な威信にもたれかかることである。こうして1958年2月、アラブ連合共和国は成立した。

一応きりぬけた危機はしかしまた別のところからやってきた。3年連続したかんばつである。農業が根幹となっている経済にとってこの影響は深刻であった。シリアの国民所得はスエズ戦争以前にもどっていると計算されている^(註3)。合併後バアス党は補欠選挙および地方選挙で大敗している。シリアには雨と支配者とを関連させる俗信があるが、凶作による社会不安が反政府活動に発展することを恐れたナセルは、かつての期待が大きかっただけに反動の大きさを警戒する必要を感じていたに違いない。昨年末から今年にかけてバアス党系の関係はもろろんシリア州副大統領ホウラ

ーニマデが辞職した。すでに軍部ではバアス党色は薄れたと伝えられ、エジプト人があいついで要職につき始めている。こうした傾向が何を意味するか、どのような反応を招致するかは即断できないが、バイルートの自由な空気に比べてダマスクスの町には一種の重苦しさがあり軍人の多いことが目だつ。

II バアス党の性格

バアス党を好んで共産党と同一視する風潮が一部にあることはさきにも述べたが、綱要によってその性格をみてみることにしよう^(註4)。

この党が基本的憲章とするのはつぎの3点である。

- (1) アラブの統一と自由
- (2) アラブの民族的特長
- (3) アラブの使命

まずアラブの政治的・経済的および文化的同一性を説き、ついでこの統一を妨げているのは人工的な力であるが、それはアラブの目ざめによって除去されるものである。アラブは統一される自由をもっており、統一されることなくしてその潜在的能力が発揮されることもないという。この潜在的能力を喚起して人類に尽くすことがアラブの使命であり、そのためにアラブはコロニアリズムおよびこれに関連する悪とあらゆる手段をもって闘うという。そしてアラブの特長は豊かな生命力と発明の才をもって、つねに変革し再興してきたところにある、と。

これが「永久」的な憲章なのである。そこにあるのはアラブの統一と反植民地主義への明確な態度だけである。だから「復興アラブ社会党は、民族主義が永遠の存在であることを確信する民族主義者の党である」ともいわれる。民族主義者とし

てアラブの統一と自由のために「植民地主義およびこれにまつわる悪と闘う」からには、植民地主義と結託した封建的権力・封建的体制を敵としなければならない、これら「国民の総意」によらないものは国民の主権を侵してはならないと「人民主義者」であるバアス党は「宣言」する。そして「国民の精神的・物的発展をたえず保証するものは社会主義だけである」と確信している。「バアス党は革命的政党であって、その究極目標であるアラブの目ざめと社会主義建設は革命と闘争なしには実現されない」、「漸進的改革や部分的な改良はそのおくびようさと機会を失うことのために究極目標に達しえない。したがってアラブの完全な自由を達成するために外国の植民地主義と闘う」というとき、その「革命的」性格の意味がいかにか自覚されているかは論ずるまでもなからう。「バアス党は社会主義政党であり」、アラブのもつ「潜在的能力を発揮させるものは社会主義以外になく」、社会主義は「アラブ民族主義から必然的に導き出されるものであって」、「アラブの潜在的能力を実現させる」「模範的な体制」なのであるという。

この社会主義政党は、「アラブの世界における土地の配分がきわめて不公平なので……公平な基礎ののっとなって再配分されなければならない」と信じている。「すべての国民は人間として同等の資格を認め」られなければならないから、「他人の労働を搾取することをこの党は禁止する」。天然資源を大規模に利用する公共施設、公共企業、大規模産業、運輸交通機関は「国民の財産であって、国家によって直接監督される」、また「すべての外国会社、外人居留地は廃止されなければならない」と考えている。農耕地の「所有」は「所有者の耕作能力と経済計画の範囲内」にとどめ

られ、また企業の「所有」は「国民の大部分が享受する経済的水準によって決められる」。「不動産の所有もすべての国民に許された権利であるが、利息をとって貸借することや他人の犠牲においてこれらを利用することは許されない」。さらに「政府はすべての国民に最小限度の不動産を保証する」。

これらに示されたかぎり、このプログラムは社会主義的ではあるが、この党の意図する「革命」なるものは全く「中産階級」革命の性格をもつものであることがわかる。その意味ではイスラエルが最も徹底した社会主義建設方針をとっている。イスラエルの社会主義建設が世界的にはそうした意味での注目をあびることなく、バアス党の方が危険視されているのはバアス党のラディカルな民族主義・中立主義のせいであろう。

またこの党は階級区別の除去を目ざしてはいるが、階級の存在そのものの根絶を必ずしも目ざすものではないように思われる。こうしたところにも微妙なニュアンスがあるといえよう。

む す び

民族主義は圧倒的な国民感情として挙国一致体制確立の実を示すことができる。だがまた後進性を脱しきれない社会・経済的背景をもつところでは、民族主義のにない手となる階層を確保していないという点で弱みをもっている。シリアのように農業が経済の土台をなし、中産階級はまだ封建遺制をひきずっており、プロレタリアートも結束と統一を示していないところでは、階級的には封建的地主層などの方がまだ近代的な要素をもつことが多々あるし、また容易に統一されやすい。近代化を進めようとするものとしては、そのにない手たるべき階級に近代性が乏しく、逆に封建制、

植民地体制のいない手により多く近代的要素をみるという矛盾に直面して、新しいにない手の育成に熱中するわけで、バアス党が民族主義政党としてねらっているところは中産階級の確立であるといえよう。

いくつかのクーデターやバアス党の動きはもちろん、人民党までを含めてみても、そこに一貫しているのは未熟な中産階級の権力確保、体制確立への努力であって、ある者は性急に権力を集めすぎて大衆から遊離し、あるものは中産階級として未熟なるがゆえに既存の勢力や外国の力にたよろうとして民族主義の資格を失い、反動化に追い込まれる。バアス党としても民族主義の急進分子として青年、学生、軍人などをとらえていてもそれらの階級的無性格性のゆえに啓蒙の役割と批判者の地位からはぬけがたいように思われる。U. A. R.の成立のさい、バアス党はアラブ統一、アラブの単一国家への結集というスローガンが具体的な計画と方法とをもっていないことを露呈したように、今後の活動についても同党のもつユートピア的性格が、具体的体験を通じていかに現実的なものになってゆくかが注目される。

シリアに生まれ、「ダマスカスに最高司令部をおき」、「アラブ諸国にブランチをもつ」この党が、ナセル体制下では名目上は国民連合に吸収され、その点からもあるいはシリアのエジプト化に拍車がかげられたとはいえるが、そしてまたバアス党とナセルの関係の悪化ということも語られるけれども、もともとナセルの政策とバアス党のイデオロギーとに根本的な相違はないし、ナセルが現実政治の感覚で処理してきたようなことは少なくとも理論的展開からするかぎりバアス党がより体系的に表明していたように思える。民族主義政党としても当初から完全にエジプトを含めた意

味での民族統一理念ではなかったらしく、民族主義運動の発達のうちでその構想が広がったとみられるふしもあり、それが何よりもまずエジプト人としての自覚のもとに行動した自由将校団の場合と同様であるらしい。

いずれにしても民族主義政党としてアラブ統一を説いてきたこの党が、シリア生まれのカラーを完全に脱してアラブ民族主義のイデオロギーを代弁してゆくかどうか、社会主義政党として社会主義の国イスラエルとの関係や社会主義インターとの関係をどう処理してゆくか、などまだ不明な要素を多く残している。その意味では同党の本質的な性格と役割はこれからはっきりするといつてよい。

(注1) Charles Thayer, *Diplomat*, (London, 1960), p. 58 ff 参照。

(注2) Daniel Lerner, *The Passing of Traditional Society: Modernizing Middle East*, (Glencoe, Illinois: Free Press, 1958.) に収録されている聞きとりによるデータはなまなましい。

(注3) *The Economist Intelligence Unit: Syria, Lebanon, Jordan*, (Three monthly Economic Review) No. 14, Aug. および No. 15, Oct. 1959.

(注4) もっとも接しやすきものとしては、Leonard Binder (ed.), "The Constitution of the Arab Resurrection—(Ba'ath) Socialist Party of Syria." *The Middle East Journal*, Spring, 1959, pp. 195~200 がある。

(後記)

東京で出発まぎわにメモしたバアス党に関する記録を当地に持ってこなかったため文献や引用には正確を期しがたい。当地で確認できる資料はすべて利用したが、最も重要であったと記憶する *Mustim World* の昨年末および今年初頭にのった論文を再読吟味できなかったことはなはだ心残りである。その著者、論文名ともに不詳である。

また当地で接したバアス党の出版物およびミシェル・アフラクの著書などをはじめ、イラクやヨルダンにおけるバアス党の動きなどについて、知識の不足を補う作業によって本稿は書きあらためられるべきものと信ずる。その意味で本稿は未定稿であり、あくまでも「覚え書き」にすぎない。予想に反して文献事情が不備な当地では、この準備的作業にあたって利用した文献を再検討できなかったし、したがって注を付して引用個所を明示することも思うにまかせない。

なお重要な示唆を受けたものを列記すればつぎのとおりである。

熊田亨, 『砂漠に渴いたもの——中東 1944~1958』, 東洋経済新報社, 昭和34年, 296 ページ。
 Walter Zeév Laqueur. *The Soviet Union and the Middle East*. New York: Praeger, London: Routledge & Paul, 1959. Pp. 366.

_____(ed.). *The Middle East in Tradition*. New York: Praeger, 1958.

_____. *Communism and Nationalism in the Middle East*. London: Routledge & Paul, 1956. Pp. 362.

Doreen Warriner. *Land Reform and Development in the Middle East: A Study of Egypt, Syria, and Iraq*. London: Royal Institute of International Affairs, 1957. Pp. 197.

Daniel Lerner. *The Passing of Traditional Society: Modernizing the Middle East*. Glencoe, Illinois: Free Press, 1958. Pp. 466.

またこの数年間の *The Arab World* および最近のバイルート各紙による所も多かった。

(アジア経済研究所 海外派遣員)

——在バイルート——

ア ジ ア の 人 口 構 造

—— アジア経済研究シリーズ 1 ——

総 括.....	南 亮 三 郎
—— 研究の方法・各章の概括・成果の展望 ——	
第 1 章 アジアの人口分布.....	木 内 信 蔵・田 辺 裕
—— 分布上の特色と問題の所在・人口分布の全般的特徴・人口分布の国別考察・研究の見通し ——	
第 2 章 アジアの人口増加.....	黒 田 俊 夫
—— アジアの人口問題に対する世界的関心・人口増加の大きさと増加率・アジアの人口増加論とその研究・自然変動と出生力の問題 ——	
第 3 章 アジアの人口構造.....	上 田 正 夫・吉 田 忠 雄
—— デモグラフィ的構造・社会的構造分析 ——	
第 4 章 アジアの労働力人口.....	畑 井 義 隆・南 亮 進
—— 労働力人口のデモグラフィ的特徴・労働力人口の経済的特徴 ——	
第 5 章 アジアの人口移動.....	岡 田 実・加 藤 寿 延
—— 概観・アジアの国際移動・アジアの国内移動・残された問題 ——	
第 6 章 アジアの人口再生産力.....	寺 尾 琢 磨・安 川 正 彬・石 南 国
—— 人口再生産力の意味・低開発国の特徴・発展方程式・発展の阻害要因・経済発展と人口要因・Leibenstein の理論に対する Hicks の批判と Samuelson の開発理論 ——	
第 7 章 アジア人口の将来.....	館 稔・小 林 和 正
—— 地域の将来人口・国別の将来人口・推計結果よりみた近い将来におけるアジア諸国の人口増加 ——	
(付録) 関係文献目録.....	水 野 朝 夫